

杜牧の散文について : その思想的基盤の解明

愛甲, 弘志
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9772>

出版情報 : 中国文学論集. 9, pp.30-53, 1980-11-01. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

杜牧の散文について

——その思想的基盤の解明——

愛 甲 弘 志

—

晩唐第一の詩人としてその名が高い杜牧は、從來、その詩風より推して、ひじょうに繊細な感覺の持ち主であつたと考えられ、またさまざまの彼のエピソードより推して、風流才子としてのイメージを強く我々に與えている。しかしながら、一方、杜牧の散文に着目してみると、そうした彼の詩歌やエピソードから類推した杜牧像とは、かなり印象の違った人間像が構成されてくるように思われる。そこで、本稿では、不遇な杜牧の幼少期に形成された思想の原質と、彼の散文を支える思想的基盤を探ることによって、散文家としての杜牧の思想の様態が何如なる原理を内包するものであつたかについて、できる限りの考察を加えてみることにしたい。

—

杜牧（字は牧之）は、徳宗の貞元十九年癸未（八〇三）、當時、長安都市圏にあつた京兆府萬年縣安仁里で、杜從

郁の長男として生まれた。貞元十九年といえ、李白没後四十一年、杜甫没後三十三年で、時に韓愈は三十五歳、白居易・劉禹錫はいずれも三十一歳、柳宗元は三十歳、元稹は二十四歳、李賀は十四歳の年に當たる。そして、これを文學史の上から見るならば、このころは、ちょうど中唐から晩唐へと文壇の風潮が移行しつつあった時期である。

ところで今、杜牧の家系を辿ってみると、遠くは前漢の杜周、その子延年、後漢の杜篤、西晉の杜預、近くは曾祖父に杜希望、祖父に杜佑がおり、杜氏は、代々名門の譽れが高く典型的な門閥貴族であったといえる。なかんずく曾祖父杜希望は河西隴右節度使に任ぜられ、さらに祖父杜佑も司徒平章事岐國公となり、太傅を贈られたほどの人物であつて、杜牧を溯る極めて近い世代まで、彼の家系は高位高官の傑物を輩出していた。それにも拘らず、杜牧の幼少時代は、かなり不遇だったようである。

式方……長慶二年三月、位に卒し、禮部尙書を贈らる。式方、性孝友にして、弟兄尤も睦じ。季弟從郁、少くして疾病多く、式方毎に躬自ら煎調し、藥膳水飲、式方の手を經るに非ずんば、口に入れず。從郁天喪するに及び、終年號泣し、殆ど情に勝へず。士友之を多とす。〔舊唐書〕卷一百四十七 杜佑傳附杜式方傳

從郁、元和の初め左補闕と爲る。崔羣等、宰相の子なるを以て嫌と爲し、再び秘書丞に徙り、駕部員外郎に終る。〔唐書〕卷一百六十六 杜佑傳附杜從郁傳

この兩文は、杜牧の父從郁に關する記事であるが、これによれば、從郁は、彼が左補闕になった「元和の初め」(八〇六頃)から、その兄式方の卒年に當たる「長慶二年(八二二)三月」までの間に亡くなったことがわかる。の

みならず、杜牧のたった一人の同胞である弟杜顥について、杜牧は、その作「唐故淮南支使大理評事兼監察御史杜君（杜顥）墓誌銘」（『樊川文集』卷九）において「年四十五、大中五年二月二十五日卒す」という。この記事から逆算すれば、弟杜顥の生年は元和二年（八〇七）となり、この年には、恐らく、父從郁はまだ存命中であったはずである。従って、このような史實より推せば、杜牧の父從郁の亡くなった時期は、少なくとも元和二年（八〇七）以後、長慶二年（八三二）に至るまでの間であり、いいかえれば杜牧が五歳から二十歳までの期間となる。

そして、さらにこの期間を絞って父從郁の卒年を推定すれば、杜牧四十九歳の時に作った「宰相に上りて湖州を求むるの第二啓」には、自分の幼少時代の生活状態に觸れて次のように言っている。

某啓す。某幼くして孤貧。安仁の舊第は開元の末に置くも、某には屋三十間有るのみ。去る元和の末、息錢を酬償して、他人の有と爲り、此に因りて移り去る。八年の中に、凡そ十たび其の居を徙り、奴婢寒餓し、衰老なる者は死し、少壯なる者は當面に逃げ去るも、呵め制する能はず。一豎有り、戀戀として憫嘆し、百卷の書を挈（ひ）げて隨へば之を養ふ。奔走困苦するも、容庇せらるる所無く、延福の私廟に歸死せんとし、欲壞せるを支拄して之に處る。長兄は驢を以て、親舊に遊（あそ）び丐ひ、某と弟の顥とは、野の蒿藿を食み、寒きときも夜燭無く、黙して記する所者凡そ三周歲、知己に遭遇し、各々及第して官を得たり。（『樊川文集』卷十六）

この啓は、杜牧が家庭の貧困を理由に湖州刺史にならんことを求めた請願書である。文中には、かなり誇張もあるようだが、いづれにしても、元和の末（八二〇頃）から、杜牧が科擧の試験に合格する大和二年（八二八）までの八年間、かなりの貧困状態にあったことがわかる。このようなことから考えると、杜牧の父從郁は、元和十五年

(八二〇)頃、つまり、杜牧十八歳の頃に亡くなった可能性が高い。

さて、まだ年若い杜牧の境涯には、父の早世という悲運の他に、さらに弟杜顥の眼疾という不幸までも重なって来た。

顥、字は勝之。幼くして目を病み、母、其の學を爲すを禁ず。(『唐書』卷一百六十六 杜佑傳附杜顥傳)

このように、杜顥は目が不自由であり、後に杜牧は、官位を得てから、昇進に大きく影響するにもかかわらず、それを承知の上で、敢えて京官を捨てて、外官に轉出することを求めたことしばしばであったが、これは、弟杜顥の目の治療代を得る爲でもあった。

今までに挙げた資料から推してみても、幼少期の杜牧の境遇は、父の病弱、そして早世、それに弟の眼疾など、いろいろと生活に暗い面が多く、また、經濟的にも恵まれていなかったことがわかる。⁽¹⁾従って彼の家庭の實情は、およそ門閥貴族と呼ぶには、あまりにもかけ離れており、既に名目だけの貴族に凋落した家だったといえる。

一方、杜牧の從兄にあたる杜悰は、杜牧十二歳の時に、憲宗の長女岐陽公主と婚を結び、輝かしい將來を約束されるのであるが、恵まれない環境の中で育った杜牧の身近に、このような幸運児がいたということは、彼自身、いっそう自らの不遇意識を倍加させたであろう。同じ名門の子として生まれながら、没落していく者と榮えつつある者との非情なまでの明暗を、杜牧は幼くして、すでに身にしみるほど痛感させられていたのである。

牧の從兄悰、時に隆盛なるも、牧は下位に居りて、心常に樂しからず。(『舊唐書』卷一百四十七 杜佑傳附杜牧

傳)

杜牧の散文について (愛甲)

從兄・將相を更歴するも、牧は回躓して自ら振はず、頗る快快として平らかならず。〔『唐書』卷一百六十

六 杜佑傳附杜牧傳）

このように仕官後の杜牧が、杜悰に對して快い感情を抱いていなかったについては、先に述べたように、彼に不遇な幼少期があったことを重重考慮に入れなくてはならないであろう。

また、官界に進出するに當たつて、杜師損、杜式方、杜從郁、杜悰など、杜牧をとりまく一門のほとんどが、科擧の試験を受けることなく、門蔭に依つて官位を得たのに對して、杜牧・杜顥の兄弟は、科擧の試験に應じなければならなかつた。『唐書』の「選舉志」には、

凡そ蔭を用ゐるに、一品の子は正七品上、二品の子は正七品下、三品の子は從七品上……正五品の子は從八品上、從五品及び國公の子は從八品下。……三品以上は曾孫まで蔭ふ。五品以上は孫まで蔭ふ。孫は子を降ること一等、曾孫は孫を降ること一等。……〔『唐書』卷四十五）

とあり、門蔭に依ることができるのは、品階が五品までの者であつて、杜牧の場合は、從六品上（駕部員外郎）で終つた父從郁の蔭には依れなかつたが、正一品で終つた祖父杜佑の蔭に依るならば、當然、科擧の試験に應じることを免れ得たはずである。しかしながら、杜牧が、門蔭に依らず、敢えて科擧の試験に應じたということは、既に一般の門閥貴族の子弟とは異なつた意識が杜牧の心中にあつたのではないだろうか。そこには、當時、新興士大夫層の官界進出の中にあつて、進士出身の方が出世が早いからだという原因だけで説明し盡くせない、杜牧の複雑な心境を窺えるであろう。

以上述べてきた所の杜牧の不遇な環境が、彼の生活意識の上に何らかの變革を迫ったであろうことは、充分に考えられることである。

某幼きとき『禮』を讀み、「四郊に墨多きは卿大夫の辱なり」に至り、謂らく、「其の書、眞にして虚説ならず。」と。年十六の時、盜起こりて二三百里を圍り、將相を係虜し、刺史及び其の官屬を族誅して、屍は城郭を塞ぎ、山東は崩壞し、股股焉として聲の朝廷を振はずを見る。其の時に當たりて、將兵をして誅を行はしめし者は、則ち必ず壯健にして擊刺を善くする者なり。卿大夫は、行列進退、一として常時の如く、笑歌嬉遊して、輒ち辱と爲さず。辱に當たりて辱とせざるのみに非ずして、以爲らく、「山東の亂事は、我輩の宜しく當るに足らず、教へと爲すに足らず。」と。某此れより謂らく、「幼きとき讀みし所の『禮』は、眞に妄人の言にして、信を取讀み、其の、其の國を樹立し、其の國を滅亡せしむるは、未だ兵に由らずんばあらざるを見るなり。兵を主る者、聖賢材能、多聞博識の士なれば、則ち必ず其の國を樹立するなり。壯健擊刺、學ばざるの徒なれば、則ち必ず其の國を敗亡するなり。然る後、信に知る、「國家を爲す者は、兵を最も大と爲し、賢卿大夫に非ずんば、其の事に堪任たふべからず、苟し敗滅有らば、眞に卿大夫の辱なる。」を。信に虚ならざるなり。」(『樊川文集』卷十「注孫子序」)

杜牧の散文について (愛甲)

杜牧が施した『孫子』の注は、現在、宋の吉天保が撰した『孫子十家註』の中に見られるが、この序文の内容は、山東の兵亂という國家の一大事に當たつて、當時の卿大夫が、全く關知しようとしなかつた無責任さを批判する一方、この事件を契機として、十六歳から二十歳にかけての杜牧に官僚觀の一大變革があつたことも物語っている。つまり、卿大夫という高級官僚層に對する從來の認識の見直しである。山東の變事に對して、彼ら卿大夫が眞劍に取り組もうとせず、「行列進退、一として常時の如く、笑歌嬉遊して、輒ち辱と爲さず」という情ない狀態であり、そうした卿大夫が教養として必ず讀んだ『禮記』の教えなど、彼自身にとつては、「眞に妄人の言にして、信を取るに足らず、教へと爲すに足らず」といったものであることに氣が付き、強く經典に對して不信感を抱くようになったのである。確かに彼自身、中國全體の階級構造の上からみるならば、士大夫層に屬することは嚴然たる事實である。従つて、それまで杜牧の目に映つた『禮記』も、貴族階級に生み落とされた彼の宿命的な經學意識から、これを貴重な教えとして自然に受容していたのであるが、今や安穩とした貴族ではありえなくなつた嚴しい現實と、天下泰平とはいえなくなつた唐王朝の中にあつて、彼は、目の前で起つた山東の兵亂に全く關知しようとして、士大夫達の無氣力で無責任な言動を通して、改めて士大夫について、ひいては近い將來士大夫となるべき自身について、深刻に考え直すようになったのである。

のみならず、杜牧の、自分自身をも含めた士大夫に對する認識は、決してこうした消極的なものだけにとどまらない、それは、やがて、「兵を主る者、ただ聖賢材能、多聞博識の士大夫こそが、國家を樹立し得る」という新たな使命感となつてあらわれてくる。つまり杜牧は、士大夫に對する過去の幻想から脱却して、積極的に國家の現實

に對應する士大夫として變貌を遂げていったのである。この杜牧の自覺は、唐王朝の衰退を必死になつてくい止めようとする一部の士大夫達の心意氣とも共通するものがあるといえよう。

そして、彼のこの經學觀・官僚觀の變革期、使命感の自覺期であつた十六歳から二十歳までの時期は、おおむね彼の父が亡くなつた時期と一致するが、私は、父の死をも含めた杜牧の不遇な境遇が、直接に彼に上述のような意識の變革を迫つたのだと考へたい。

かくして彼は、以前の安穩とした士大夫でありえなくなつた反面、それでもなお士大夫層から脱け出すことが不可能であるというジレンマの中で、積極的に現實に對應する士大夫として變貌を遂げていったが、そうした杜牧の思想をささえるものは、いったい何であつたのか。

四

これまで見てきたように、幼少期の杜牧を取り圍んでいた環境は、けつして恵まれたものではなかつた。その環境が幼き杜牧に課した不可避的な試練に耐え抜く中で、彼は、何事にも妥協せぬ強い精神力、さらには不合理な偏見と先入觀を排撃する批判力を養ふことができたようである。杜牧が、經書よりも、より現實的な史書・兵書へと目を向けるようになったのは、こうした境遇の過程から必然的にでてきた結果であつたといえるであらう。

幼少期の苦難の中で鍛え上げられた彼の洞察力・批判力が如何に鋭いものであつたかについて、例えば、宋の費衰の『梁谿漫志』卷六には、次の如き記事がある。

杜牧の散文について (愛甲)

歐陽公、『新唐書』列傳を取りて、子の叔弼をして讀ましめ、臥して之を聽き、「藩鎮傳」敍に至りて、嘆じて曰く、「若し皆此の傳の敍の如くならば、筆力亦た及ぶべからず。」と。

この記事にいう『新唐書』藩鎮傳敍は、ほとんど杜牧の「守論」⁽²⁾からの引用で占められている。だとすれば、歐陽修は、この「守論」に展開された杜牧の時局に對する優れた見解を絶賛したわけである。⁽³⁾「守論」全文は『樊川文集』卷五に見える。また、杜牧の時局に關する論策として、『唐書』卷一百六十六の杜牧の傳に「罪言」、「唐書」卷二百十五の突厥傳に「戰論」、「資治通鑑」唐紀卷六十二に「戰論」「守論」「原十六衛」「罪言」等の諸作品が載せられている。さらに、また牛李の黨争の中で、杜牧は牛僧孺側にあつたのだが、それと對立する李黨の旗頭である李德裕でさえも、杜牧の論策を高く評價し、彼の澤潞・回鶻對策を採用しているほどである。

宰相李德裕、素より其の才を奇とす。會昌中、黠愛斯、回鶻を破り、回鶻の種落、潰^{つぶ}えて漠南に入る。牧、德裕に説く、「遂^よりて之を取るに如かず。……（中略）……。」と。德裕、之を善しとす。會、劉稹、命を拒めば、諸鎮の兵に詔して之を討たしむ。牧、復た書を德裕に移す。「……（中略）……。」と。俄かにして澤潞平らぎ、略^略牧の策の如し。『唐書』卷一百六十六 杜佑傳附杜牧傳

右文の中略部分に當たる杜牧の計略は、それぞれ彼の「上李太尉北邊事啓」(『樊川文集』卷十六)と「上李司徒相公論用兵書」(同卷十一)との要約である。他に李德裕に上申して自分の策を述べたものに「上李太尉論江賊書」(同卷十一)があり、また李德裕以外に上申したものに「上門下崔相公書」(同卷十一)がある。

このような晚唐期の政治狀況に切要な論策が杜牧の手で多數作られたばかりでなく、彼はまた、『孫子』にも注

を施している。それに對して清の李慈銘は次のように評價している。

『孫子』の十家注を校ぶるに、曹公・李荃以外は、杜牧最も優る。古事を證引し、亦た切要多し。樊川は眞に用世の才にして、其の「罪言」「原十六衛」等の篇、虚作ならざるを知る。〔越縵堂讀書記〕同治壬申五月十一日）
李慈銘の他にも、後世杜牧の論策に對する評價は極めて高い。これらは杜牧の論策が、いずれも鋭い洞察力と批判力にて作られている爲に、立場や時代を越えて、充分に耳を傾けるに足るだけの説得力を有していたことを物語っている。

もっとも、彼自身そのような論策に對してかなりの自信をもっていたのである。

牧、書を讀むを好み、詩に工にして文を爲り、嘗に經緯才略を自負す。〔舊唐書〕卷一百四十七 杜佑傳附杜牧傳）
牧、剛直にして奇節有り、齷齪たる小謹を爲さず、敢へて大事を論列し、病利を指陳すること尤も切至。少くして李甘・李中敏・宗邗と善きも、其の古今に通じ、善く成敗に處するは、甘等及ばざるなり。〔唐書〕卷一百六十六 杜佑傳附杜牧傳）

某、世々儒學を業とし、高・曾より某の身に至るまで、家風墜ちず。少小より孜孜として、今に至るまで怠らざるも、性顯固にして、經に通ずる能はず。治亂興亡の跡、財賦兵甲の事、地形の險易遠近、古人の長短得失に于いては、中丞廊廟に即歸して、宰制手に在るも、或いは時事に因りて堂下に召置し、之を坐せしめて與に語る。此の時、諸生を廻顧して、必ず恩獎を辱しめざるを期せり。〔樊川文集〕卷十二 「上李中丞書」）

このように、杜牧は、自分に史家・經世家としての才能のあることを常々矜っていたのである。

杜牧の散文について（愛甲）

この事に關聯して、杜牧は、その黃州刺史時代に、次のような注目すべき見解を洩らしている。

僕、元和より已來、以て今日に至るまで、其の見聞する所は、名公才人の論討する所、典刑制度、征伐叛亂なり。其の當時を考へ、前古に參じ、能く忘失せずして思念し、亦た以て一家の事業と爲すべし。但だ隨見隨忘、隨聞隨廢、目を輕んじて耳を重んずるの過、此れも亦た學者の大病なり。〔樊川文集〕卷十三 「上池州李使君」
このような「實際に見て確かめることを疎かにして、人から聞いたことばかりを重視する」學者の通弊に對する杜牧の批判は、實證的科學的見地に立つた歴史家・經世家の態度といえる。

そこで、杜牧が、このような實證的科學的態度をいっそう強めるに至った理由について考えるならば、杜牧の職歴が大きく關係しているように思われる。杜牧の職歴をしてみると、京官よりも外官にある方が長く、あしかけ十七年にも及ぶ地方官務めは、彼をして、持ち前の歴史家的眼識で以て、冷靜に中央政府を、或いは中國全體を見つめさせる絶好の機會となつたといえる。

鋭い洞察力と批判力を有していることは、歴史家としての必須の條件である。そして鋭い洞察力と批判力をもつ歴史家に與えられた課題は、まずなによりも經國にある。杜牧は、幼き時の不遇な境遇の中で、歴史家の任に充分耐えうるだけの見識を養つていたのである。

これは、同じ境遇の中で育つた杜牧の弟杜顛の場合でも、同様なことが言える。

李德裕、奏して浙西府の賓佐と爲る。德裕貴盛にして、賓客は敢へて忤まからふ無く、惟だ顛のみ數しばしばば之を諫正す。袁州に謫せらるるに及びて、歎じて曰く、「門下我を愛すること皆顛の如くならば、吾れ今日無からん。」と。

〔唐書〕卷一百六十六 杜佑傳附杜顥傳

この記事は、杜顥が李德裕の「貴盛」に、決して妥協することなく、「諫め正した」ことを述べたエピソードであるが、このような杜顥の性格は、杜牧の「牧、剛直にして奇節有り、齷齪たる小謹を爲さず。敢へて大事を論列し、病利を指陳すること尤も切至。」(前掲)という気風と共通するものがある。

五

さらに、歴史家としての杜牧が形成されるのに見逃してはならないものに、祖父杜佑の存在がある。例えば、次に掲げる「冬至日小姪阿宜に寄するの詩」(『樊川文集』卷一)からも、杜牧が如何に杜佑を意識していたかを知ることが出来る。

(前略)

我家公相家 我家は公相の家

劍珮嘗丁當 劍珮嘗て丁當たり

舊第開朱門 舊第 朱門を開く

長安城中央 長安の城まの中央

第中無一物 第中に一物無く

萬卷書滿堂 萬卷の書堂に満つ

杜牧の散文について (愛甲)

家書二百編 家書二百編

上下馳皇王 上下皇王に馳す

多是撫州寫 多く是れ撫州の寫

今來五紀強 今來五紀強

尙可與爾讀 尙ほ爾に與へて讀ましめ

助爾爲賢良 爾を助けて賢良と爲さしむべし

經書括根本 經書は根本を括し

史書閱興亡 史書は興亡を閱す

高摘屈宋豔 高く屈宋の豔を摘し

濃薰班馬香 濃く班馬の香に薰す

この詩でいう「家書二百編」とは、杜佑の『通典』二百卷を指しており、恐らくは、杜牧も幼き時にこれを熱心に讀んだのであろう。ところで從來、杜牧と杜佑との關係を述べる場合、この詩の中で杜牧が、杜佑の『通典』二百卷について言及しているという理由だけで、杜牧が杜佑をかなり強く意識していたと説く人は多いが、さらに、この『通典』二百卷のもつ性格について検討してみると、よりいっそう、杜牧と杜佑との關係は密接につながってくるように思⁽⁴⁾える。

佑少きとき嘗^つに書^を讀む。而れども性且つ蒙固にして、術數の藝に達せず、章句の學を好まず。纂^ずする所の

『通典』は、實に群言を採り、諸々の人事を徵め、將に有政に施さんとす。夫れ理導の先は教化に在るか。教化の本は衣食足れるに在るか。易に稱す、「人を聚むるに財を曰ふ。」と。洪範の八政は、一に曰く食、二に曰く貨。管子に曰く、「倉廩實つれば禮節を知り、衣食足れば榮辱を知る。」と。夫子曰く、「既に富みて而して教ふ。」と。斯れを之れ謂ふかな。夫れ教化を行なふは、職官を設くるに在り。職官を設くるは、官才を審らかにするに在り。官才を審らかにするは、選舉を精しくするに在り。禮を制して以て其の俗を端ただし、樂を立てて以て其の心を和するは、此れ先哲王の致治の大方なり。故に職官を設けて然る後禮樂を興し、教化驟すたれて然る後刑罰を用ひ、州郡を分けて分領せしめ、邊防を置きて戎狄を遏やむ。是を以て食貨、之を首と爲す。選舉之に次ぎ、職官又之に次ぎ、禮又之に次ぎ、樂又之に次ぎ、刑又之に次ぎ、州郡又之に次ぎ、邊防之を末とす。或いは之を覽る者、庶はくは篇第の旨を知らんことを。

ここに引いたのは、『通典』序の全文であるが、この中で、杜佑は、『管子』卷一の牧民篇の冒頭部分をかなり長く引いている。その他、この序の中で援引している典籍には、『周易』繫辭傳下、『周易』洪範、『論語』子路篇があるが、これらの言うところは、すべて『管子』牧民篇に述べている趣旨とほぼ同じである。つまり、杜佑は、『管子』牧民篇の「倉廩がみちあふれて始めて禮節を知り、衣食の料が十分であって始めて道德意識が強まる」という趣旨に則って、この『通典』二百卷を編んだのである。『管子』の元來の著者とされる管仲は、柿村峻氏の言に依れば、⁽⁵⁾「管仲の思想の主流は政治論・經濟論であり、そこに現實主義が貫いている。儒家のように『先王の道』を呼號しなかつた。理想主義者でもなく、觀念論者でもない。唯物論者といえよう。」という。杜佑はこの「唯物

論者管仲」にかなりの影響を受けていたようである。そのことは、『唐書』藝文志に、『管氏指略』二卷という杜佑自身の撰者が記載されていることから明らかであり、杜佑の『管子』に對する傾倒ぶりが理解できよう。

また、杜佑の言動にも、法家管子の思想が濃厚に窺われる。

佑、性敦厚強力にして、尤も吏職に精し。外に寛和を示すと雖も、身を持するに術有り。爲政弘易にして、儻察を尙えずして治民を掌計す。物便にして濟し、戎を馭して變に應ずるは、即ち長とする所に非ず。性、學を嗜み、古今に該涉し、富國安人の術を以て己が任と爲す。(『舊唐書』卷一百四十七 杜佑傳)

この文中で「國を富ませ、人民を安んずることを自分の使命とした」というのは、單に杜佑が國家を運營する宰相の地位にあったからだけではない。こうした彼の政治的態度には、やはり法家的發想があるように思われる。つまりそれは、『荀子』の「富國篇」を彷彿させるし、又『管子』の「治國篇」に述べる「凡そ國を治むるの道は、必ず先づ民を富ます。民富めば則ち治め易きなり」という政治思想にも通じている。

また鈴木修次氏は、『唐代詩人論』⁽⁶⁾の中で、「進士出身の革新的官僚が、王伾・王叔文を旗頭にして、世にいう順宗の政治改革を斷行したのであったが、杜佑が革新官僚たちにかつがれて、度支鹽鐵使を拜命したのは合理主義的性格のゆえだ。」(要約)と説いている。

また『舊唐書』本傳に、杜佑の行狀に關して、

唯だ淮南に在りし時、妻梁氏の亡き後、嬖妾李氏を上げて正室と爲し、密國夫人に封ぜらる。親族子弟、之を言ふも從はず。時論之を非とす。

という記事があるが、これについても、鈴木氏は、「かくべつふしぎなことではないが、當時においては、よほど合理性がなければできないことである。」と述べている。私は、鈴木氏が説くように、杜佑にかかる合理性を持った行動をとらしめたのは、杜佑の思想に『管子』と大きく關わる法家的發想があつたからだと考える。

鈴木氏は、さらに續けて「當時は、李德裕や鄭覃らの保守的世家貴族がしだいに、その勢力をもちかえしつつある時期であり、順宗の改革政治も、實のところは宦官と結んだ保守的貴族勢力に敗れたのであつた。杜牧の家門には、一面においてある種の自由な空氣が流れていたといえる。この家風が、後の杜牧にも少なからぬ影響を與えたといえよう。」と説いている。的確な指摘だと思ふ。

六

杜牧の「三子言性辯」は次のように言う。

孟子言へり、「人の性は善なり」と。荀子言へり、「人の性は惡なり」と。楊子言へり、「人の性は善惡混じれり」と。喜と曰ひ、哀と曰ひ、懼と曰ひ、惡と曰ひ、欲と曰ひ、愛と曰ひ、怒と曰ふ、夫の七者は情なり。情は性より出づるなり。夫れ七情の中、愛・怒の二者は、生まれながらにして能く自^{そな}ふ。是の二者は、性の根にして惡の端なり。乳兒、乳を見れば、必ず拏み求め、得ざれば即ち啼く。是れ愛と怒とは、兒と俱に生まるるなり。夫れ豈に其の五者を知らんや。既に壯にして、五者隨ひて生まるるなり。或いは有り、或いは亡く、或いは厚く、或いは薄し。愛・怒に至りては、曾ち須臾も乳兒と相離れずして、壯に至るなり。君子の性は、愛

杜牧の散文について (愛甲)

も怒も淡然として、道より出れず。中人の以て上下すべき者は、愛の禮に拘る有り、怒の法を懼るる有り。世に禮法有れば、其の踰ぎること有る者も、敢へては其の情を恣にせず、世に禮法無ければ、亦隨ひて熾なり。小人に至りては、禮法有りと雖も、制する能はず。愛さば則ち之を求め、求めて得ざれば即ち怒り、怒れば則ち亂る。故に曰ふ、「愛と怒とは、性の本にして惡の端なり。乳兒と俱に生じ、相隨ひて壯に至るなり」と。凡そ性情の善なる者を言ふには、多く舜禹を引き、不善なる者を言ふには、多く丹朱・商均を引く。夫れ舜禹の二君子は、生人より己來、二君子が如き者、凡そ幾人か有る。引きて以て諭と爲すべからず。丹朱・商均は堯舜の子たり。夫れ堯舜の世に生まれ、其の化を被れば、皆善人と爲らん。況んや其の室に生まれ、親しく父子たるをや。蒸して潤す能はず、灼りて熱する能はず。是れ其の惡は堯舜の善と等しきのみ。天は止だ一日のみ。光明なる者を言ひて、豈に引きて以て諭と爲すべけんや。人の品類は、上下に與すべき者衆く、上下に與すべきの性は、愛・怒多きに居る。愛・怒は、惡の端なり。荀は人の性の惡なるを言ふ。二子に比ぶるに、荀は得ること多し。〔『樊川文集』卷六〕

この「三子言性辯」を見ると、杜牧が、孟子・荀子・楊子の中で、荀子を最も高く評價していたことがわかる。孔子を祖とする儒教は、曾子から子思、子思から孟子へといった流れを正統とするのが通説であり、その孟子は性善説を主張している。これに對して、孟子と同時代の荀子は性惡説を立て、性善説を説く孟子を嚴しく非難している。そして杜牧は、人間には喜・哀・懼・惡・欲・愛・怒の七情があり、中でも愛と怒とは、生まれながらにして備わっている性の根本であり、惡の發端でもあるという。

荀子は、儒家に屬する思想家ではあるが、かなり異端視された、どちらかといえば、法家に近い思想家であり、また、當時にあっては、ひじょうに科學的思考をし得る人物でもあった。内山俊彦氏は、その著書『荀子』の中で「孟子の、史實を『一治一亂』に構成し、聖王たちの系譜を通じて自らの政治理想を推し出す觀念的歴史意識に對し、荀子の歴史の開始を見ようとする眼は冷靜で客觀的である。孟子の場合、『一治一亂』という歴史の振幅に自らを投げこみ、聖人の系譜の媒介者として自らを規定するので對象としての歴史と主體としての自己との間の切れ目はなお明確でない。これにくらべ荀子の冷靜な見方は、歴史を對象化する契機を強く持っていたといえよう。この間の對比は、孟子の人間觀としての『性善』説が道德は人間に内在すると考へる。その意味で主觀的なものだったのにくらべ、荀子の性惡説は、道德を、人の『性』に作爲が加えられた結果と考へる。その意味で客觀的なものであったという對比に共通する。」と説いている。このような史實を客觀化し得る科學的思考を持った人物こそ、あの戰國末期の動亂期の中で、最も必要とされたものであらう。荀子の弟子の李斯と韓非子の貢獻に依つて秦が大帝國を形成することができたのは、彼らの歴史觀と大いに關わっているからであるといえよう。

荀子の生きた戰國の動亂期は、そのまま晩唐とも共通するものがある。當時、唐という國家こそまだ分裂してはいなかったが、玄宗による開元・天寶の治を頂點とした唐王朝も安史の亂を直接の契機に、没落の途を辿り藩鎮の跋扈、宦官の專政、人民の疲弊などさまざまな問題が表面化し、天下はそれら難問題の解決を當時の士大夫に迫つたのである。

従つて、『荀子』の中晩唐の文人達に與へた影響は、かなり大きいようである。柳宗元・劉禹錫と『荀子』との

關係については既に説かれているところであるし、韓愈にも「讀荀」(『韓昌黎文集』卷二)なる作品がある。その他、性・情の問題に言及した文人もかなりおり、楊炯の『荀子注』も、戰國末期にも似た中晩唐期の時代的要請であつたのであろう。とにかく中晩唐期において、『荀子』は當時の知識人達が避けて通れない問題を含む古典であつたといえる。このような時代背景と幼少期の不遇な環境の中で、杜牧は、自分自身をも含めた救亡の道を『荀子』の思想に見たのではなからうか。更に、次の「論相」なる作品を見るならば、杜牧がいかに『荀子』の思想を重視していたかがわかる。

呂公、善く人を相る。言ふ、「女の呂は後に當に大貴たるべし。宜しく以て季(漢の高祖の字)に配すべし。」と。季、後に天子と爲り、呂后も復た天下を稱制して、呂氏の子弟を王とし、悉く大國を以てす。隋の文帝、相工來和らいかの輩數人も亦た言ふ、「當に帝と爲るべき者。」と。後に篡竊して、果たして之を得たり。誠に相法の謬らざるかな。呂氏自ら稱制し、通じて后と爲ること凡そ二十餘年、隋氏も篡より滅に至るまで凡そ三十六年間、男女族屬、殺滅せられて殆ど盡く。秦末に當たりて、呂氏は大族なり。周末、楊氏は八柱國と爲りて、公侯相襲ふこと久し。一旦、一女一男子の位號を偷竊するを以て、三二十年間ならずして、壯老嬰兒、皆其の死を得ず。知らず、一女子の、呂氏の福と爲れるか、禍と爲れるか、一男子の、楊氏の禍と爲れるか、福と爲れるかを。一時の貴を得て、百世の族を滅ぼすは、彼の相法を知る者、當に曰ふべし、「此れ必ず呂氏・楊氏の禍なり。乃ち善く人を相るを爲すべし。」と。今一指を斷ちて四海を得れば、凡そ人爲すことを欲せず。況んや一女子一男子を以て一族に易ふるをや。余、荀卿の「非相」を讀み、因りて呂氏・楊氏に感じ、卿の大儒たるを

知る。(『樊川文集』卷五)

これを見ると、杜牧が「卿の大儒たるを知る」と述べているように、荀子にかなり傾倒していたことがわかる。そして、この作品の題を「論相」と銘打ったこと自體、『荀子』中の「非相篇」を意識したものであることは明らかである。荀子の科學的な思考態度は、唯に人間觀、歴史觀のみならず、このような實生活の上にも押し擴められて、人相等で人の將來を豫言することの不合理性を説いているが、この水際立った合理的思考が杜牧の共感を大いに誘ったわけである。

また、『荀子』に初めて注を施した唐の楊倞は、その序に元和十三年(八一八)十二月の日付を打っている。元和十三年といえは、杜牧十六歳の最も不遇だったと言える時期であり、彼が、この楊倞の『荀子』を、晚唐という時代及び自分自身の境遇と照らし合わせて、感銘深く讀んだ可能性は極めて高い。のみならず、この『荀子』に注を施した楊倞は、杜牧とかなり近い關係にあつた人物のようでもある。もっともこの楊倞なる人物には疑わしい所もあり、『唐書』藝文志は、この楊倞を楊汝士の子としているが、一方、同書の宰相世系表では、楊汝士に三人の子供がおりながら、その中に當の楊倞の名は見えない。しかし、もし『四庫提要』でいうように、この三人の子のうち、いづれかが「倞」と名を改めているとすれば、父の楊汝士は杜牧と同じく牛黨に與した人であり、従つて杜牧と楊倞との距離は更に近くなるといえる。

杜牧の散文について (愛甲)

七

このように杜牧の歴史觀が、かなり客觀的なものであり、そして、その人間觀も『荀子』に強く影響されている事實を考えると、彼が更に魏の武帝曹操をかなり高く評價していることも、蓋し當然の成り行きであるといえよう。

杜牧が『孫子』に注を施した動機については、彼の「注孫子序」の終りの部分を見るならばわかるように、曹操の『孫子注』を強く意識していたからだといえる。

(孫)武の著す所の書、凡そ數十萬言、曹魏の武帝、其の繁剩を削り、其の精切を筆し、凡そ十三篇、成して一編と爲す。曹自ら序を爲り、因りて之に注解して曰く、「吾、兵書戰策を讀むこと多し。孫武深し。」と。然れども其の爲す所の注解、十に一も釋かず、此れは蓋し曹の盡く注解する能はざるに非ざるなり。予『魏志』を尋ね、曹自ら兵書十餘萬言を作り、諸將征伐するに、皆新書を以て事に從ひ、令に從ふ者は尅捷し、教に違ふ者は負敗するを見る。意へらく、「曹自ら新書中に於て其の説を馳驟して、自ら一家の事業を成し、孫武の後に隨ひて盡く其の書を解するを欲せず。然らずんば、曹豈に能はざるか。」と。今新書已に亡び復た知るべからず。予因りて孫武の書を取りて其の注を備へ、曹の注する所、亦た盡く之を存し、分ちて上中下三卷と爲す。(前掲)

これを見るならば、杜牧が如何に曹操を高く評價していたかが知れよう。

さらに、又曹操の臣下荀彧が、曹操が魏公にならんとしたことを諫めて、曹操の怒りをかい、爲に憂悶して薨じた史實に對して、從來、多くの人は、荀彧に同情の念を寄せているが、杜牧は「題荀文若傳後」(『樊川文集』卷六)なる一文の中で「(その當時において)曹操以外に誰が天下を取り得たであろうか」と曹操を賞め讃えて「文若(荀彧)の死は當然である」と述べている。

このように、杜牧は、曹操を高く評價していたことがわかるが、いったいそれは、どのような觀點に立つての評價であつたのであろうか。今それを端的にいえば、兵家或いは歴史家たるにふさわしい彼の客觀的な合理精神によるものであるといえる。曹操が非合理の世界に反撥した態度については、井波律子氏が既に詳しく述べているが、⁽¹¹⁾例えば、曹操が濟南に居た時、神壇を壞した行動は、杜牧が「塞廢井文」(『樊川文集』卷六)の中で、「ひたすら舊習を墨守して枯れた古井戸を塞がなかつたならば、その爲に人の死を招く」といい、いわれなき因習を鋭く批判した合理精神と相通するものがあるといえる。

八

これまで私は、杜牧の幼少期に於ける人生觀・世界觀の變革形成に、後の杜牧の人間觀・歴史觀など全てを包括する彼の思想の原點を求め、その人生觀の變革形成に影響を與えたであろう諸々の要因と、その人生觀・世界觀が彼の言行のどのような面に現われているのかについて述べてきたが、更に検討を加えるならば、杜牧が杜佑、荀子そして曹操らをかなり強く意識していた事實には、一定の共通項があるといえる。それは、時代の轉變を超越し

た、或いは主觀的なものに全く左右されない徹底した合理主義ではないかと思う。神秘的なものは、客觀的科學的な思考に依つて否定されるし、因習的形式的なものは、より現實的合理的な理論に依つて押し流される。杜牧の幼少期における社會意識や學問的價值觀の志向は、もともと眞實の探究を冀う彼の知的・社會的欲求の現われであるし、それを學んでいくうちに、更に絶對的なものに敏感に反應する彼の感覺が研ぎすまされていったのである。彼の歴史を見る目、或いは人間を見る目は、非常に冷めてゐる。それ故に杜牧は、杜佑を、荀子を、そして曹操を強く意識してゐるのである。もつとも、人間には、全て、より確かなものへという上昇志向があるが、それが外に現われる形態は一樣ではない。杜牧の場合、その價值判斷の基準になるスケールを合理主義という形に求めたのである。そして杜牧の散文の中で最も高く評價されている論策文は、この合理主義という思想的原理に支えられていたといえる。

最後に、杜牧の散文を見るならば、彼は古文家の中に入れられる人物である。そこで、私がこれまで論じてきたことと古文家としての杜牧を考え合わせてみるならば、相互に納得のいく點がかなりでてきそうであるが、杜牧の散文が中唐以後の古文運動史の中で、どのような位置づけがなされるのか、また本論で述べた彼の合理思想と彼の詩作態度とは、どのように結びつけられるのか、というような問題をも含めて、今後の私の課題としたい。

註

- (1) 杜牧の父從都の在世中でも、駕部員外郎の品階は從六品の上であり、築山治三郎氏の『唐代政治制度の研究』第五章、第三節「官僚の俸祿と生活」には、五品を境に俸給等かなり差別されていたことを述べている。

(2) 費袞は誤って「守論」を「罪言」としている。

(3) 費袞の『梁谿漫志』では、その後「此恐未必然。藩鎮傳敍乃全用杜牧之罪言耳。正如項羽傳贊撥取買生過秦論、故奇崛可觀而非遷固之文也」と述べ、歐陽脩と費袞の意見は同じではない。

(4) 杜佑の『通典』については、『唐代の史學思想』（金井之忠氏著）中の「政典と通典」及び、『思想概論』（中國文化叢書）中の加賀榮治氏「歴史觀」等に於て言及されている。

(5) 『管子』（中國古典新書）二二二頁。

(6) 『唐代詩人論』（鳳出版）下卷「杜牧」の項。

(7) 『荀子』（評論社）一六三頁。

(8) 重澤俊郎氏「柳宗元に見える唐代の合理主義」（『日本中國學會報』三）。

金谷治氏「劉禹錫の天論」（『日本中國學會報』二二）。

(9) 『四庫全書總目提要』子部儒家類「荀子」の項。

(10) 岑仲勉氏の『隋唐史』（高等教育出版社一九五七）四〇三頁には、楊汝士を牛黨に入れている。

(11) 「曹揆論」（『中國文學報』二三）。